

## 土木が守り育てる自然環境・こども環境 「森づくりを体験しよう」

福田道路株式会社 正会員 北添 慎吾

### 1. はじめに 尼崎の森中央緑地

兵庫県の自然は「日本の縮図」とも言われるほど多様性に富んでいる。その兵庫県の中でも戦後急速に工業化した尼崎市の臨海部の工場跡地(29ha)に「種子からはじめる・地域にこだわる・県民の参画と協働による」森づくりが土木事業として現在実施されている。

【事業主体】: 兵庫県 【アドバイザー】: 兵庫県立大学・人と自然の博物館

【計画・設計・指導】: コンサルタント企業 【造成工事】: 建設業者

【植栽】: ボランティア団体(アマフォレストの会)

アマフォレストの会: 地域に自生する植物から種子をとり「タネから育てる 100 年の森づくり」を行い、「森の作り方」「森のたのしみ方」「環境学習」を柱に多様性豊かな森をつくり育てる活動を実施しているボランティア団体である。

### 2. これまでの緑地・公園づくり 「管理型」の緑地・公園に「愛着」があるのか?

これまでの緑地・公園づくり及び維持管理は、行政が主体となり造成から植栽すべてを土木系の業者のみが行なっているためか、利用者にとって緑地・公園は一部を除いて「人まかせ」的な公共施設となっている。果たして、そのような「管理型」の緑地・公園に「愛着」を持つことができるのだろうか。

### 3. 新しい公共へ 地域住民が土木事業の一部を担う

「愛着」が持てる公共施設を実現するためには、地域住民の「出番」が必要である。これからは計画・設計段階から地域住民が事業に関わる事で、自らが「創り、守り、育てる」という実践活動が可能な公共事業、つまり「新しい公共」を育てていかななくてはならない。

### 4. 身近な里山づくり 高齢者と子供のチカラを使う

「人と社会・人と自然」とのつながりが低下していると言われて、どれくらい経ったのであろうか。高齢者と言われる世代の里山体験は貴重であり、この世代の方々のチカラと子供の元気なチカラを使って「森づくり」を行うことで、「人と社会・人と自然」がつながる里山文化を復活させたい。そのためには、我々土木業界がしっかり学び、支えていかななくてはならない。そこで経験を積んだ子供が大人になり、そして親になり・・・を繰り返すことで、持続的な里山コミュニティが復活して、「愛着」の持てる持続可能な緑地・公園となる。

### 5. 実践活動 子供の環境学習「森づくりを体験しよう」

尼崎の森中央緑地は官民一体となって進んでいる。その一部を支えているのが「アマフォレストの会」である。長い年月をかけて対話と勉強を重ねながら地域の種子採取、土づくり、種まき、植樹、間伐、草取りなどの世話をし植物の成長を見守ることで、この森づくりが個人の楽しみを越えて、地域の人たちとの楽しい共同作業となっている。そして、この共同作業を通して学んだ大人たちが、子供たちの環境学習「森づくり」体験のお手伝いをしている。この活動を50～100年単位で継続させて、私たちの世代から子供たち、そして孫たちの世代へと里山コミュニティを引き継いでいくのである。

### 6. 活動の効果 子供たちの反応とその効果

小学3年生を対象とした環境学習は多い時で3校/1ヶ月あり、高校生の活動もあった。小学生は土をいじるだけでも大喜びで、種まき、植替え、運搬、植樹ともに真剣に取り組んでいた。また、「森づくりへの想い」を伝える事に加え、「はじまりの森」の見学、セミの卵の観察など自然観察を取り入れることで、

キーワード 人まかせ、愛着、地域の種子、「発見」「体験」、つなげる、官民協働

連絡先 〒556-0011 大阪市浪速区難波中3丁目9番1号 福田道路(株) 関西支店 TEL06-6649-1389

環境学習に深みを持たせている。小学生の反応は想像以上で、自分たちが育てていく森として「愛着」を持ち、サケのように「新たな命」とともに帰ってきてくれるのではないかと期待している。



写真1 種まき



写真2 植替え



写真3 運搬



写真4 植樹

## 6. 今後に向けての課題とその解決策

### 子育て世代の参加が少ない

#### 【4-1. 課題】

30～40代に活動する人がいない

働き盛り、子育て盛りの30～40代には時間が足りない。またこのような活動があることを知らない。

無関心な親世代をどうするか

親世代に身近な自然に触れるという経験が少ないことから、興味そのものがない。

事業費と工期

人手は多いが、未経験者を相手にするために準備等に大きな時間と手間が生じる。

#### 【4-2. 解決策】

企業のCSR活動からスタート

最初はCSRの業務の一部として体験して頂く。但し、業務として活動してしまうと本質からはずれてしまう。

子供たちが「楽しんで学ぶ」ことで親と先生を巻き込む

「発見」「体験」をキーワードに、学習から実践、実践から学習へと自律的に発展するサイクルを構築する。

費用対効果の検証

リピーターの数の把握、満足度、コミュニティ活動の効果の検証を実施して積極的に情報発信を行う。

## 7. 今後の展開(土木屋として)

### 「人と社会・人と自然をつなげる」という使命感を持って!

我々は効率性・利便性を追及するという社会的な要求に応えるために努力を重ねてきた。しかし、そこに「人と社会・人と自然のつながり」という考えが抜けていたように感じる。これからの土木事業は「人と社会・人と自然をつなげる」という使命感を持ち、多少の時間とコストが生じて、地域が守り育てたいと思えるような環境をつくる気構えが必要である。そこには地域の「目」が存在し、親にとっては安全・安心、子供にとっては自然に触れ合い、自由に遊ぶことができる持続可能で素敵な「場」が、必ず生まれるはずだ。

【道路・河川への展開】「活動していただく」アドプト活動から「共に考える」防災コミュニティ活動へ「愛着」の持てる道づくり、川づくりを実現するためには、地域で活動している様々なボランティア団体とネットワークでつながることが重要となる。ボランティア団体が主催するイベント等を通して地域住民(子供を中心)に事業への関心を持っていただくことで、防災コミュニティ活動の発展へと期待が持てる。

## 8. おわりに

### 見学主体の社会勉強及び環境学習から、実体験を伴う継続的な活動へ

今後の土木事業のあり方を考える上で、今回紹介した「官民協働の森づくり」に注目していただきたい。そして世代間を越えてつながるために、実体験を伴う継続的な活動(現場体験→基礎的学習→発展的学習→行動学習)を増やして、子供たちに「ホンモノの自然観」と「社会とのつながり」を身につけてもらいたい。今後もアマフォレストの活動を楽しみながら、活動効果の検証と情報発信を継続することで「人と社会がつながる」土木事業の構築に向けて、努力を続けていきたい。

【協力】アマフォレストの会(代表:高木さん)(榊里と水辺研究所、兵庫県)